書評

北陸古代手工業生産史研究会『北陸の古代手工業生産』

菱田哲郎

一

ものから出発して人類の過去を明らかにしようという考古学の方法にとって、ものそのものの生産を扱う手工業生産史は、最もアプローチしやすい分野の一つである。また、古代においては地方の歴史は文献資料に残されにくく、その解明に考古学の成果が寄与するところは大きい。一九八九年に刊行された北陸古代手工業生産史研究会編『北陸の古代手工業生産』は、このような考古学の特性が発揮された成果として結実したものである。本書は徹底した生産遺跡の集成をおこない、編年によって整理し、分布を把握することから、地域ごとの生産の動向を明らかにしている。そして、個別的な手工業生産の一部門の歴史、あるいは地域の手工業史を目ざすのではなく、生産・流通の歴史を通して、古代の社会構造を浮き上がらせることに射程をおいている。そこで用いられている研究の方法は、これから各地で試みられるべき方向を示唆する一つのモデルワークと言ってよいだろう。ここでは本書を紹介するとともに、考古学による手工業生産史研究の意義や問題点を探ってみたいと思う。

本書では、手工業生産部門の中から須恵器・瓦・鉄・塩をとりあげ、それらが基幹産業とも言うべき重要な位置を占めていたという意義づけをおこなっている。ここでは、内容の紹介にはいる前に、それぞれの生産のもつ特徴を整理しておきたい。一般に考古学によって引き出される生産に関する情報として、生産址、生産用具、生産物を挙げることができる。その資料の把握しやすさを表にしてあらわすと左のようになる。

	生産址	生産用具	生産物
須恵器	◎	△	◎
瓦	◎	△	◎
鉄	○	△	△
塩	○	○	×

ほかの生産、たとえば布生産や木器の生産では、右の各部門と比べると格段に情報の量、質が劣ることは明らかである。本書では、生産遺跡の分布をできるだけ同じ水準で示すという点に力点がおかれているが、生産址が明らか、あるいは生産用具から生産址が推定しやすいという条件を、とりあげられた各生産部門はよくみたしていると言える。ただし、同じ窯業生産の一部門である土師器生産が、生産址や生産用具が不明瞭なために扱えないといった制約もでてくる。手工業生産の幅広い分野の中で、ごく一部の分野が考古学からアプローチが容易であるという前提を十分認識しなければならない。

二

本書の構成は左記の通りである。

序　章
　北陸古代手工業生産研究の目的と意義（秋山進午）
　北陸の自然・歴史的環境（宇野隆夫・櫛木謙周）
第一章　各種生産部門の成立と展開
　北陸における須恵器生産（北野博司・池野正男）
　北陸における瓦生産（木立雅朗）
　北陸における塩生産（小嶋芳孝・宇野隆夫）
　北陸における鉄生産（関　清）
第二章　旧国別における手工業生産の様相
　若狭・越前における古代手工業生産の様相（久保智康）
　加賀・能登における古代手工業生産の様相（田嶋明人・小嶋芳孝）
　越中における古代手工業生産の様相（宇野隆夫）
　越後における古代手工業生産の様相（坂井秀弥）
第三章　律令制期における手工業発展の特質（櫛木謙周）
第四章　古代手工業生産遺跡の自然科学的考察（広岡公夫）
結　語　北陸における古代手工業生産の展開とその意義（宇野隆夫）

本書は、福井、石川、富山、新潟の各県の調査機関と富山大学の研究者がおこなった共同研究「北陸における古代手工業生産史の研究」の成果報告として刊行されたものであり、執筆者が多数になるのもそのような事情によっている。序章では、この研究の目的や経緯が述べられ、さらに舞台となる北陸地方の自然的、人文的な特色がまとめられている。本書の中心をなすのは、第一章の手工業生産の部門別の動向、第二章の地域別の動向である。ここでは、詳細な遺跡地名表が掲載され、地図によってそれぞれの部門について、時代ごとに動向が把握できるように工夫されている。第三章では主として文献資料からみた手工業生産の特質について語られ、第四章では関連する分野として、自然科学、とくに地磁気の変化を利用した生産遺跡の研究が紹介されている。そして、最後の結語において、研究成果を概観し、位置づけをはかるという構成になっている。

本書の中核といえる第一章、第二章について、さらに詳しくみてみよう。「北陸における須恵器生産」は、北野博司氏による編年研究と池野正男氏による窯跡群の動態の概観からなる。前者では、消費遺跡の資料もふまえて、食器の組成という観点で、七世紀から一一世紀までの変遷が説かれ、それぞれの時期の組成に反映される社会の変化を読み取ろうとしている。「北陸における瓦生産」では、とくに須恵器生産との関わりに力点をおいて変遷が扱われ、須恵器生産の伝統を基礎に瓦生産が展開することを跡づけようとしている。また、軒丸瓦ばかりでなく、平瓦も用いて技術の系譜を論じており、研究の枠組みをひろげていく試みとして評価することができる。「北陸における塩生産」では、小嶋芳孝氏による製塩土器の編年、ならびに宇野隆夫氏による時期ごとの製塩遺跡の分布が取り扱われている。小嶋氏は、これまでの製塩

土器の編年をまとめるとともに、寺家遺跡などの新しい資料を用いて、平底製塩土器の編年を推し進め、製塩土器全体の変遷過程を明らかにした。関清氏による「北陸の鉄生産」は、製鉄・鍛冶関連の遺跡をもとに、北陸の製鉄技術を概観し、さらにその変遷を示している。とくに、七世紀末に大きな画期があること、一〇世紀に関東系の技術が導入されることなど、年代の決めにくい恨みのあった製鉄技術の展開を考えるうえで重要な整理がなされた。

第二章では、旧国別に手工業の動向をまとめている。若狭・越前を担当した久保智康氏は、各部門の展開を遺跡から追求したのち、若狭と越前の差異に言及し、若狭では伝統的な塩生産が拡大する一方で他の生産がふるわない点を挙げている。加賀・能登では田嶋明人氏が土器生産を扱い、「一郡一窯体制」の消長として整理した。また、同地域の塩・鉄生産を扱った小嶋芳孝氏は、須恵質の製塩土器、須恵器窯出土の製塩土器の存在、ならびに製鉄遺跡と須恵器窯の近接した分布状況を取り上げ、各部門間の交渉を積極的に評価しようとしている。越中の動向を概観した宇野隆夫氏は、手工業生産の動向を簡潔にまとめ、五つの画期を設定することによって、生産体制の推移を明確に示した。これは、結語に示された手工業生産の展開における時期区分と一致する。一方、他の地域とやや異なる様相をもつ越後については、坂井秀弥氏が須恵器生産と鉄生産についての現在の知見をまとめている。

三

須恵器、塩、鉄の生産の動向を把握するために、時期ごとの分布を明確にした点が本書の最大の特色と言える。それを可能にしたのは、基礎となる土器編年の確かさであろう。とくに、北陸古代土器研究会『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』（一九八八年）において資料が集成され、問題点が整理されたことが大きな役割を果している。

須恵器生産に関しては、「一郡一窯制」が分布によって確認され、それが七世紀初頭ごろに始まることが明らかにされた意義は大きい。これまで漠然と言われていたことではあるけれども、厳密には検証されていなかったからである。そして、その展開過程を律令制社会の推移に重ねる試みは、各地の事例研究によって検討されなければならないだろう。ところで、須恵器生産の展開は加賀を中心に述べられているが、越後ではかなり異なっているように思われる。技術系譜も東海からの影響も色濃く、北陸地方として一括することに危険がともなうのではないかとさえ感じる。議論を明確にするためにも、地域ごとの性格の違いを巨視的に眺めておく必要があったのではないかと考える。

塩、鉄の生産地については、遺跡の確認が容易でないため、これまで分布を集成する作業も十分にはおこなわれてこなかった。また、遺跡の年代を決めるのにも困難がともなう場合が多いが、現状での知見を総合して、時期ごとの様相が導き出された点は意義深い。両者が、ともに七世紀末から八世紀頭に分布をひろげていることは、結語の中でも位置づけられているように、手工業生産全体の変化として捉えるべきであろう。また、本書では、須恵器生産と塩生産、須恵器生産と鉄生産というように、異なる部門間の関係が意識的に扱われている。ただし、須恵器と鉄について、小嶋氏が積極的に評価するのに対し、関氏が慎重な姿勢であるよ

うに、必ずしも本書の中で論調が統一されてはいない。生産者が同じなのか、補完関係をもつのか、あるいは生産用具を供給するだけなのかというように、関与の程度をそれぞれの場合に検討していくことが必要である。その意味では、瓦と須恵器の関係を整理した木立氏の方法が重視できる。

本書では、主として分布の変化から手工業生産の推移を読み取ろうとした。すなわち、七、八世紀を通してみられる生産地の確立過程を国家の政策と考え、小規模分散化を経て集約化にいたる過程に、律令制的生産体制の解体と中世的生産の萌芽を重ねている。このような大きな枠組みを提示しえた点は、高く評価しなければならない。しかし、手工業生産史を扱ううえでは、さらに別の二点の検討が必要不可欠であると考える。その一つは技術系譜の問題である。分布がひろがるときに、どこからどのように拡散するのかということを吟味することから、手工業を担った人々の実像に迫れるのではないかと思われる。七世紀に須恵器生産の「一郡一窯体制」が始まるとされるが、技術はどのように伝えられたのであろうか。また、北陸地方の製鉄のはじまりに近江との関係がほのめかされている。このような点が実証されるならば、さらに明確な社会像を提供してくれるものと考える。他の一点は、生産地の性格の差である。たとえば、越中の射水丘陵や加賀の粟津丘陵の須恵器生産と鉄生産は、質、量ともに他からぬきんでた内容をもっており、とくに前者で生産された瓦が越中国府の隣接寺院に供給されているように、地域中心を控えた生産地であることがわかる。これと同様の例は、近江の地域中心を控えた生産地である瀬田丘陵の須恵器生産、鉄生産にも認められる。このような生産地こそ拠点と呼ぶのにふさわしいと考えるが、それ以外の生産地との質的な相違をみていく必要が感じられる。時期ごとの分布が把握できたという大きな果実が得られた今、手工業生産史の理解をさらに深めて、古代社会の実像に迫ることが大いに期待されている。

遺跡の編年、およびその分布の集成という考古学の基本的な手続きを古代の生産遺跡に適用した結果、大きな成果とともに新たな課題を生み出したことをみてきた。地道で粘り強いとりくみが要求される作業であるけれども、示された成果は各地で同じ作業に携わる人たちを大いに励ますものと推察する。膨大な出土量に圧倒されて、その中に埋没ぎみの考古学研究にとって、生産・流通の歴史に組み立てていくという最も基本的な手続きの重要性を教えてくれている。

（B5版　二九一頁　一九八九年　真陽社　三〇〇〇円）

（京都大学文学部助手　　）